



“楽しい”鑑賞授業づくりのためには、まず先生自身が鑑賞し、その曲に対する様々な思いを持つことが必要です。『教材研究シート』の第2回目は、4年生の「アラ ホーンパイプ」です。
 なお、この【解説編】が聴き方の全てではありません。また、感じ方も人それぞれです。〈あなたならではの〉の気づきを授業に生かしてください。

〔第2回 4年生① 解説編〕

「アラ ホーンパイプ」(ヘンデル作曲)

※この楽曲は、教育出版<学びリンク>で、楽譜が進む動画を見ることができます。音楽に合わせて音符が点滅するので、どの楽器が演奏しているのかが分かります。教材研究に活用してみたいはいかがでしょうか。

使用する教科書とCDは、教育出版です。一度で聴き取ろうと思わずに、必要に応じて繰り返し何度でも聴いてみましょう。

【聴1】CDのトラック19を聴いて、聞こえた音や気付いたことを、大まかに書きましょう。

この曲は、“楽器の音色”や“旋律の繰り返し”のような「音楽の構造」に、まず注意が向くのではないのでしょうか。もちろん、具体的なイメージを思い浮かべても良いです。

【聴2】最初の弦楽器の旋律を、他の楽器が繰り返すことに気付きましたか？ 教科書にも、「〈主なせんりつ〉をトランペットとホルンがよびかけ合う」と説明されていますね。では先生も、CDの17をじっくりと聴いて〈主なせんりつ〉の特徴を見つけてみましょう。
 (1) 聞こえた楽器の順番を表に書き出しましょう。

しばらく弦楽器が続きます。次に聞こえてくるのは、トランペットでしょうか、それともホルンでしょうか。表に○を書きましょう。また違う音色が聞こえたら、次の列に○を書きましょう。これを数回繰り返すと、また最初の弦楽器が始まります。

※授業で、「トランペットが聞こえたら右手、ホルンが聞こえたら左手を挙げましょう。」と投げかけると、子どもたちは更に集中して聴きますよ。<学びリンク>を使うと、視覚的にも確認できます。

(2) トランペットとホルンは同じ金管楽器の仲間です。違いをよく聞き分けましたね。判断材料となった音色の違いを、言葉で表してみましょう。また、音色が変わるとどんな気持ちになりますか。イメージしたことも具体的に書いてみましょう。

対にしたり【柔らかい or 硬い】【温かい or 冷たい】【浅い or 深い】
 例えたり【ふわふわ】【〇〇のような音】 ※教科書p76も参考に。



【聴3】途中、旋律の感じが大きく変わります。CDの18をじっくりと聴いて、イメージしたことや自分の気持ち、〈主なせんりつ〉と違うことを見つけてみましょう。

【聴4】CDのトラック19で、曲全体を味わって聴き、この曲の良さやお気に入りの部分を紹介しましょう。【聴2・3】で表現したことを結びつけて書くと良いですよ。

コツは、「格好良く書こう」と思わないことです。素直に表現しましょう。



最初は音色の違いに気付かれましたが、繰り返し聴くと分かってくるものですね。気が付いたら、今回も10回近く聴いていました。

そのとおり！ 素晴らしいことに気付きましたね。

子どもたちは、その豊かな感性で、私たちが想像も付かないような素晴らしい発見をします。授業では、先生が説明するのではなく、子どもたちに何度も聴かせてたくさん感じ取らせ、言葉で表現させることが大切です。そしてその一つ一つに、「素晴らしい」「なるほど」と言葉をかけることはもっと大切です。時には、「どうして？」と問い返し、「すごい」「きれい」を別な言葉に置き換えさせましょう。先生の言葉かけ一つで、子どもたちに安心感を与え、感性がどんどん豊かになります。いかがですか。楽しく聴けましたか？ 次回もお楽しみに！





【聴1】全体の印象、聞こえた音や気付いたこと

【聴2】〈主なせんりつ〉の特徴

(1) 楽器の順番

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
弦楽器	○									
トランペット										
ホルン										



最初に戻ります。

(2) 各楽器の音色、自分の気持ち、イメージしたこと

	弦楽器	トランペット	ホルン
音色			
気持ち			
イメージ			

【聴3】イメージしたことや自分の気持ち、〈主なせんりつ〉と違うこと

いつ、どこで、だれが(何が)どうした	違い

【聴4の前に…ゆとりのある人へのおまけ】ハンデルはドイツ生まれですが、この曲を作曲した頃、イギリスに帰化しています。教科書には「船上パーティーをする王様のために作曲されました。」とありますが、“1717年のイギリス”から想像することを書いてみましょう。

※ 時代背景からも、鑑賞のヒントになることがたくさんあります。歴史好きな人におすすめです。

【聴4】この曲の良さやお気に入りの部分の紹介



「アラ ホーンパイプ」(ヘンデル作曲)



【聴1】全体の印象、聞こえた音や気付いたこと

華やか。王様になった気持ち。教科書に300年前の王様、ってあるけど、日本の？
弦楽器。ラッパの音で繰り返し。似たような音。交互に出てくる。終わったと思ったらまた繰り返した。違う雰囲気の流れになって、また最初に戻る。全体的に陽気な曲。

【聴2】〈主なせんりつ〉の特徴

このトランペットは、聞こえにくいです。
(聞こえなくても仕方ないです。)

(1) 楽器の順番

	1	2	3	4	6	7	9	10
弦楽器	○			○	○		○	○
トランペット		○		○		○	○	○
ホルン			○	○			○	○

このフェイントで、きっと盛り上がります。

最初に戻ります。

(2) 各楽器の音色、自分の気持ち、イメージしたこと

	弦楽器	トランペット	ホルン
音色	バイオリンの音が華やかな感じ。音域も高いし、とにかく華やか。	バイオリンとは違う華やかさ。はっきりと鮮明なきらびやかな感じ。幕が上がる時のファンファーレ。	トランペットより、くぐもっているように感じる。でも、力強く勇ましい感じ。
気持ち	王様になった気分。こんな音楽を聴きながら、アフタヌーンティーをいただきたい。	やる気がみなぎってくる。気持ちが高ぶる。	トランペットよりも落ち着く。でも、勇ましい音色だから、気持ちは高ぶる。
イメージ	船の上で、スコーンや紅茶をいただきながら、優雅に川を流れている。川の上だから涼しい風が吹いている。お日様の日ざしを浴びながら、ゆったりとくつろいでいる。うとうとしそうになったけど、トランペットの音で目が覚めた。トランペットとホルンで会話をしているようにも思える。		

【聴3】イメージしたことや自分の気持ち、〈主なせんりつ〉と違うこと

いつ、どこで、だれが(何が)どうした	違い
少し物悲しいような、でも泣くほどではない。自分の世界にひたっているのかな…。	トランペットとホルンが出てこない！

【聴4の前に…ゆとりのある人へのおまけ】ヘンデルはドイツ生まれですが、この曲を作曲した頃、イギリスに帰化しています。教科書には「船上パーティーをする王様のために作曲されました。」とありますが、“1717年のイギリス”から想像することを書いてみましょう。

国王は政治に介入せず、豊かな生活をしている。お城に住んで、音楽会を開いたり、劇場でオペラなどを見たりして何不自由ない生活。

※ 時代背景からも、鑑賞のヒントになることがたくさんあります。歴史好きな人におすすめです。

【聴4】この曲の良さやお気に入りの部分の紹介

最初から弦楽器の華やかな音色で気持ちが高ぶる。トランペットのきらびやかな音色と、ホルンの少し曇った音色が交互に聞こえて、会話をしているように感じるのがおもしろい。途中、金管楽器が抜けることで急に感じが変わって、うきうきした気持ちから穏やかになるところも好き。最後はまた、陽気で華やかな音楽に戻り、王様の上機嫌な表情が想像できた。

